

はじめに

9月4日から11日にかけてミクロネシア、グアムを訪問した。そこでは非日常の時間を過ごすことで、沢山のことを学んだが、その中でも特に関心を抱いた点について本レポートでは述べていきたい。

① 水道管の整備～支援の在り方について

チュークから小舟で約一時間離れたピス島を訪れ、案内人ともにピス島を散策していたことである。散策中に水道管らしきパイプ、或いは庭先には水道の蛇口（洗濯物干しの変わりに使用しているところもあったが）を目にした。後述するが、生活の殆どを雨水で賄っている島で水道管があるのは初めて見たときには一見奇異に見えた。その私の疑問を解決するものが島の内部に存在した。外国からの支援による太陽光発電を使用した水道システムの整備があった。樹木の間を通り抜けると、少し開けたところに突然近代的な建物が現れたかのようであった。そこで伺った説明によると、外国からの支援により全家庭に水道管を通したが、2～3回程使用しただけで管理の問題等で使用されなくなったらしい。そこで、感じたことは支援の在り方である。外国側が良かれと思って建設したとしても、諸問題で支援が中途半端/中止になってしまうという話はたまに耳にすることがあったが、現実に直面したのはこれが初めてである。金銭的援助のみならず技術の貢献は日本も取り組んでいるが、この問題はその整備をした国だけではなく、世界の様々な地域に支援を行っている全ての国が考えるべき問題だと思う。私はこの建物を見たとき、太陽光発電等を使っているのにも関わらず、その後の管理の問題まで建設する前に考慮に入れなかったのが非常に疑問である。諸外国が支援を申し出たときに、管理の問題については現地の方、役所の人は疑問を提示することはできなかっただろうか。せっかくの設備があるのにも関わらず、使用頻度が極端に少ないのは、支援の失敗ではないかと思う。私には理系の知識は全くないが、もし私が施設を受け入れる行政或いは政府側にいるとするならば、設備についてのみならず、その後の管理のことも踏まえて外国側の支援を受け入れたい。どうしても必要な整備で夢のようなものだったのかもしれないが、労力を使用して全家庭に水道管を通すのは並大抵のことではないと考えるので、その辺りをしっかりと考慮しないと、今回実感した思いを抱くと思う。島の人々が水道管の使用を切望し、設備の管理の問題を乗り越える技術を持った国が支援を申し出てくれれば、上手く機能するのではないか。

② 遺産相続

私は大学で家族法を受講していたこともあり、兼ねてから世界の遺産相続の話には関心があった。そこで、ピス島でお話しを伺った方のお話しを元に述べていく。なお、遺言がある場合は遺言が優先される。遺言がない場合についてのケースをここでは取り扱う。

(ケース 1)

父死亡母健在子供 3 人

この場合には父の遺産は全て母即ち父からみると妻に譲与される

(ケース 2)

父死亡母既に死亡子供 3 人

この場合には子供三人で分与する

(ケース 3)

父死亡母既に死亡子供 3 人でなおかつ子供のうち一人が家事等に熱心

この場合は、家事等に尽力があったものが遺産相続の決定権があり、殆どをもらう

これは私の拙い英語で聞き取った話なので、多少異なるかもしれない。また、これは質問を簡易にするために、家族構成に祖父母を入れていないが、祖父母や、父の兄弟等がいた場合は、また変わってくるとお聞きしたことを付け加えておく。

日本の場合、遺言がないケースだと、ケース 1 の際は、妻に二分の一、残りを子供で分ける。私が地域の独自性があるなど思ったのがケース 3 の場合である。これは、法律で規定されているのか分からないが、慣習的にそうなっているのかもしれない。このスタイルにおいては、例えば次男が積極的に家事を行っていた場合は次男が多くもらうらしく、必ずしも長男が優位ではないところが、興味ぶかかった。

③ ピス島の暮らし

ピス島での暮らしは自然の恵みを存分に味わいながら暮らす生活であった。食料は海の幸やそこに植生している物を元に毎日調理していた。たまたま調理しているところを見学させてもらっていたが、調理器具は日本と仕組みが似ているものも多く、また、うるこの外し方等も結構似ていた。食事が出てくるものは日本とは少し異なるものもあったが、刺身があったことには驚いた。また、島から小舟で別の島に行った時には、ココナッツを多用していた。ご飯に入れたりするのはもちろんだが、ココナッツの葉で食器を作ったり、レジャーシートの代わりに、ココナッツの葉を地面に敷き詰めていた。日本では古代では一つの植物を多用することはあったかもしれないが、今の日本ではなかなか見ないので目を見張るものが多かった。ココナッツの葉の編み方も教えて頂いたが、コツをつかむまでが大変で、途中で断念した。編み込みと三つ編みの組み合わせのようであった。子供の時から彼女彼等はしているのととてもスムーズに作り上げていっていたのが印象的である。

また、水問題については、生活用の水を雨水から手に入れていた。雨水を井戸にためて使用していた。当初、お手洗いをお借りしている時は、水について何も感じる事がなかったけれども、地元の人からお話を伺って以降は水の大切さを感じさせられた。雨が降っている夜に、突然地元の人に「あさこ、シャンプー持ってここに来なさい」と雨の中、屋根もないところに立たされた。何が始まるのか分からず、興味本位で指示に従った。すると、「髪の毛を洗いなさい」と言われた。日本では雨にぬれたら髪の毛も臭くなるから、帰宅するとすぐにシャワーをしているのに、どうしてここで雨水で寒い思いしながらシャワーをするのかという疑問を抱きつつシャワーを始めた。シャワーした後、地元の人が私たちは普段は雨水で髪の毛洗うのだと教えてくれた。井戸の水も元々は雨水から来ているとも話してくれて、その水を無造作に使用していることに申し訳なさを感じた。また、別の日は、お手洗いは別のタンクがあり、私はタンクの周辺に雨水を貯める装置があるのかと思っていたら、井戸の水を汲んできてくれていた様であった。量が少なくなってくみ取りに行くと、結構重労働である。それを私たちのためにお手洗いのタンクまで運んでくれたと思うだけで感謝しきれない。

次に、ピス島での時間について述べる。ピス島では時計が無く、人間の気分や自然の状況で生活が動いていた。時間に縛られている生活をしていると、たまには時間にしばられない生活をしてみたいと思うことがあるが、実際に体感してみると中々落ち着かないところもあるが、或る意味精神が解放された。ピス島は景色も良く、心のオアシスである。

④ 文化技術交流について

今回の滞在では、教育学部の先輩たちが折り紙等を持参してきており、自分が幼い頃外国にホームステイ等で行った時のことを思い出された。今でこそ、交流のメインがお話しすることに移りつつあるが、その当時は英語もままならない頃でコミュニケーションの一つとして使用していた。それはともかくとして、今回地元の方に沢山お話を伺ったが、その中で、小学校の先生とのお話も印象的だった。私は教育について知識はないけれども、こうして自国を訪れた外国人に対して現地の情報を伝え、実感させてアドバイスを貰ったり、アドバイスをする等をするのも交流の一つかなと思われた。教師同士の勉強会は日本ではあるかもしれないが、こうした小さな島の中では、先生の数も限られていたり、先生方が受けてきた教育もほぼ一緒だったりするのもかもしれない。複式学級の問題は日本も抱えている問題かもしれないが、それを一緒に話し合ったりすることはいいことだと思った。私自身が教育のお話で衝撃を受けたのが、例えば△という形を教えるのに対し、ものがないということだ。日本では沢山のものが溢れている上、小学校では算数セットというものもあった。また、もし算数セットが無くて形が無くて、粘土があれば、紙を切るより何度も使えるという環境で育ったが、ピス島にはそれがなかった。かつて、民間団体を始めとする国際的な支援に関心があった時に、不要な算数セットを回収して外国に送る企画をしているところがあり、その当時はよく理解していなかったが、今回お話を直に

伺って実感させられた。私に出来ることは少ないけれども、算数セット等を送るなどとしてできることで交流を深めることができたらと思った。

終わりに

グアムでは太平洋戦争の記念館で、日本とは違う視点からの展示や見たこともない資料等を見たり、グアム大学では世界で活躍していらっしゃる女性はどういう意識の元でお仕事されていたか教えて頂いたり、チャモロ文化を学んだりした。また、最終日のBBQにおいては、グアム滞在中のミクロネシア連邦出身の方と交流することができて楽しかった。今回の研修においては非日常な空間で毎日が刺激的であった。今回学んだこと全てを本レポートにおいて述べることはできなかったが、今後の生活の糧にしたいと強く思う。最後に、山本先生、チュークの人々、グアムの人々、ユキコ・イノウエ先生、大変お世話になりました。ありがとうございました。また、一緒に参加した他の院生の皆様、何かとご迷惑おかけしましたが、一緒に参加できてよかったです。ありがとうございました。